

# アメリカ視察報告

ぱれっとの元インターンの黒澤さんと安達さんが、11月4日～12日、アメリカのニューハンプシャーとニューヨークで研修及び視察をしてきました。ニューハンプシャーでは、障害者のコミュニティ支援サービスを、ニューヨークではNY de Volunteerが行なうボランティア活動に参加してきました。その報告をお届けします。

## ニューハンプシャー州での視察報告

去る11月7日～9日にニューハンプシャー州(以下、NH州)で障害者のindependent living(自立生活)の様子を視察してきました。NH州は米国において入所施設が閉鎖された最初の州であり、州政府と民間による地域Agencyが一体となって障害のある人でも地域で生涯自立した生活ができるようなサービスを提供しています。今回私たちを案内してくださったのは、谷口さんの知り合いでNH州政府のDevelopmental Services(障害者福祉)の部署に勤めているKaarla Westonさんです。カーラさんの案内でAgencyのサービスを受け生活をしている6人の方々の家を実際に訪問しました。

6人の住まい方には、アパートで一人暮らしをするケースとルームメイトと一緒に住むケースの2つがありました。一人暮らしをしている人たちは、本人のニーズに応じて食事作りや買い物の手伝い、ジムに出かける際の補助等のために週に何度かスタッフに来てもらっています。その中の一人、Paulさん(55歳)は幼少時に脳性マヒを患い、車いす生活を送っている方でしたが、すでに20年以上一人暮らしをしており、支援の体制はすべて彼が主体となって決めています。私たちが訪れた際にも、州政府の職員とスタッフが彼に今の暮らしに対

する要望をヒアリングしており、職員が彼のニーズに応えるべくその場でプログラム修正の指示を出している姿が大変印象的でした。NH州では個々のニーズに合わせてシステムを改善することが



【Shaneさんの家で写真を撮りました】

可能であり、既存のサービスに人が合わせている日本は学ぶべき点が多いと感じました。一方、ルームメイトと一緒に住む人たちは、2例とも身体障害を伴うケースでした。NH州には障害者がルームメイトを指名して雇うプログラムがあります。ルームメイトは賃金を受け取る代わりに、決められた時間1人にならないよう責任を負っています。ルームメイトには義務や責任が伴うため、私は最初堅苦しい関係を想像していました。しかし、最終日に訪れたShaneさん(39歳)のケースでは、彼は公募を通じて出会ったルームメイトのBobさん(67歳)と10年間一緒に暮らしており、BobさんとShaneさんはお互いに必要とし合える家族のような関係を築けていることが見て取れました。日常生活の中で当たり前

に助け合える関係は「ばれっとの家 いこっと」の目指す理念とも共通していると思いました。

視察全体を通して、NH州の障害者福祉のサービスシステムの充実には米国の人権擁護の思想、大型施設の歴史への反省と地域移行を成し遂げた努力が色濃く反映されていることを強く感じました。

元ばれっとインターン 安達 徹

#### ニューヨークでの視察報告

11月10日(水)、ニューヨークにてNY de Volunteer(以下NY d V)の活動に参加してきました。NY d Vとは、ニューヨーク在住の日本人が中心となってボランティア活動を行ない、社会問題の解決に取り組んでいるNPO法人です。私たちは、現地の小学生向けのアフタースクールプログラムとして、着物、習字、折り紙、お箸体験の4つのテーブルを作り、日本文化紹介の活動に参加しました。当日のボランティアは、NY在住のスタッフ、日本人留学生、観光で来ている学生など多様な人が集まっていました。



【日本文化紹介・習字体験の様子】

#### ●子供たちの表現の豊かさ

私は、習字のプログラムに参加し、小学生一人につき「力」「美」「空」といった漢字の手本を見せながら子供たちに漢字を書いてもらいました。筆の持ち方、

書き順、余白の使い方、全く教えた通りには書いてはくれませんでした、「この字を書きたい」「一番難しい字はどれ」と子供たちの意欲的な姿勢には感心しました。小さい頃から自分の意見を伝える、自分の感情を表現するということが習慣になっているのだと感じました。

#### ●ボランティアの力

現地での活動は英語を満足に話さることができない私がボランティアをするという不思議な体験でした。私たち日本人もニューヨークに行けば、人種の違う人々のなかに混ざり、言葉もうまく通じないマイノリティです。言葉が通じないというだけで不安になり、居にくさを感じてしまう場合もあると思います。私のように不安を感じながら参加するボランティアにとっても、子供たちからの「アリガトウ」という言葉に勇気をもらうことができました。やはり、ボランティア活動には人種や文化を乗り越えてしまう力があるのだと再認識しました。

#### ●場の雰囲気づくり

見習いたいと思ったのは、即興で場の雰囲気をつくり出す上手さです。活動は初参加者が多く、私たちボランティアにとって現地の子どもたちと接するのは初めてでした。それにも関わらず、初めて参加しているという感覚は全く感じず、その場の雰囲気に溶け込むことができました。これは、スタッフの方々の場を盛り上げる上手さがあったからだと思います。初参加者が溶け込みやすい場をつくるための声のかけ方、場の盛り上げ方。子供たちが自信をもつために褒める、励ますといったことなど、スタッフの方々の子どもたちと向き合う姿勢から多くのことを学ばせて頂きました。こ

これらの貴重な経験を日本での今後の活動に活かしていきたいと思います。

元ぱれっとインターン 黒澤 友貴

#### NY d V で活動している仲間たち

今回のニューヨーク出張の折、8月に日本で講演をお願いした日野紀子さんが代表の「ニューヨークでボランティア」(以下 NY d V)主催の「NY d V サロン」で、ぱれっとの活動と、これまでの28年間を通して私自身の生き方をお話しする機会を頂き、ボランティアのお宅をお借りしてファンドレイジングも兼ねた会には40人ほどが集まりました。

参加者は、留学生や夫の転勤で NY に住むが長い主婦、週一回地域を掃除しているグループ「ゴミニュケーション」の男性や、現地で障害者問題に取り組んでいる女性など、多彩な顔ぶれでした。どの参加者からも、NY に魅力を感じ、何かをせずにはいられない強い想いが伝わってきて、私も思わず身を乗り出して話しこみました。それだけに、NY d V とつながりのあるぱれっとへの強い関心は、ビデオで実際に活動を見た後の多岐に渡る質問からもうかがえました。

翌日、送られてきた感想メールの中に、「私は1987年に朝のワイド番組の

中で、障害者と健常者が一緒に作り上げていくぱれっとの行ないを取り上げた事を思い出します。私も12年を締めくくる NY でこの話が聞けるのも何かの縁で、これからのエネルギーに変えていけたらと強く思いました。」という元ラジオ局のアナウンサーをしていた女性のメールを読んで、出会いの不思議さに感動しました。23年ぶりの再会です。

ぱれっとのスタートから28年、私は常に障害者と向き合ってきました。その体験から、「一人では何もできない」ということを実感したのです。人との出会いから新しいものを生み、広がっていくことに勇気付けられ、次のエネルギー源となって課題を解決してきました。かつて、異なった障害を持つ当事者が集まって、誰にも優しい住まいをハード面から考える話し合いをしたことがあります。そして、ハード面には限界あり、「人の声かけ、手の差し伸べ」、つまり、ソフト面は絶対に欠かせないという結論に達したことを思い出します。

2002年の NY d V との出会いが、8年後に今夏の講演会へと発展し、ぱれっとインターンによる現地視察へと広がった現実、確かな手ごたえを感じます。

NPO 法人ぱれっと理事長 谷口奈保子

### NY d V の 活 動 内 容

(国税局から 501(c)(3) IRS Status 税金控除資格取得)

- Explore Japanese Culture An After School  
(日本文化紹介アフタースクール)
- Japanese Spa Day  
(美を通して社会貢献)
- 9.11 犠牲者法要灯ろう流しで日本文化紹介
- Clean Up New York  
(NY 市公共施設美化運動)

